

# 塩竈の歩み

## 海運の発展を支えた造船業

大正から昭和初期にかけて、塩釜港は航路の浚渫、岸壁、倉庫、給水、給油設備、乾ドックなど、港湾施設が整備され、北浜地区には造船所の工場群が形成されました。（現在の東北ドック鉄工(株)周辺）

終戦後、造船業は沈静化しましたが、地元の造船業の再生への期待が高まり、昭和32年に東北造船(株)が創立しました。高度経済成長により「造船業は日本のお家芸」と言われ、活況の時代に入りました。昭和40年代には、造船所に地元や全国から働き手が集まり、従業員数は千人規模になりました。

貨物船の大型化に対応するため、昭和48年には60トンの荷を吊ることができるよう工場内で最も大きい1号クレーンを設置し、ピーク時には、2〜3万トン級の貨物船を年に2〜3隻作っていました。国内の船会社や商社からの受注が主で、そのほか、海上保安庁の巡視船、漁業実習船などを建造しました。しかし、オイルショックを機に造船需要は減退し、昭和62年に東北造船(株)は東北ドック鉄工(株)に名前を変え、新造船の建造は行われなくなりました。

現在は、修理専用ドックとして大型の漁船や水産高校の実習船、巡視船、漁業調査船、タグボートなど、海で働くさまざまな船舶の修繕を行い、安全な航海と操業を支えています。



▲昭和18年に作られた海水を抜いて船体を修理できる乾ドック(1号ドック) 写真は現在の様子

◀千葉さんと高さ約35メートルの2号クレーン。工場内には同型の3号クレーンがあり、いずれも昭和18年に設置され、78年間稼働し続けている



華やかと船を折念瞬間で華やかに、くす玉の瓶を安全に当てるに、海へ送り出しました。仕事の苦勞が報われるでしたね。

取材に承えていただいた  
東北ドック鉄工(株)  
船舶事業部長 千葉 修さん  
昭和56年に前身の東北造船(株)に入社

## 雲外蒼天

市長コラム

昭和16年11月23日、県内3番目の市となる塩竈市が誕生しました。当時の記念事業として、市章・塩竈市民歌の歌詞の公募を行い、朝日に黒潮をあしらい、躍動する港湾都市を象徴した現在の市章が昭和17年4月1日に制定されました。

私は昭和42年生まれ。幼少の記憶は、かつての塩竈線の貨物列車、現在の港橋の横にあった昇開式可動橋、赤い陸橋(港奥部)、旧魚市場(現在のマリングेट塩釜)、日本塩釜駅(吉番館)など、個々人があの日あの時の情景を想うことは、先人、地域に対する敬意にも繋がるのではないのでしょうか。

大戦や経済危機、度重なる自然災害など、幾多の困難を乗り越え、今日の塩竈があります。

時代が変われど、困難を乗り越える知恵を過去から学ぶ必要性を感じています。コロナに負けない！今こそ、その想いを強く…！



塩竈市長  
依藤 光樹